

令和2年度 学校評価（総括評価表）

重点課題	重点目標	評価指標	評価		総合評価	学校関係者評価 (学校関係者の意見)
			評価指標による達成度	自己評価		
◆児童生徒一人一人を大切にし、その個性や能力に応じた自己実現をめざす教育を推進する。	＜小学部＞ ・児童一人一人の特性や能力に応じた支援により、一人一人が学びと成長を実感できる授業づくりを行い、それぞれの力を発揮できる教育の推進を図る。	①研究授業の指導内容及び指導案検討会を年間4回以上行い、小学部の全ての教員が積極的に授業づくりに関わる。	A		A	<ul style="list-style-type: none"> ・評議員就任までは特別支援学校との関わりが薄く、就任当初は特別支援教育の取組が十分理解できない面もあった。この度、授業の様子等を画像や動画で視聴することで、配付資料と併せ、「サマリー」を見せていただいたようで、特別支援学校の取組がよく理解できた。 ・学校の取組が昨年度よりも前進しているように感じた。今後は、教員一人一人のICT活用能力がさらに必要とされるため、定期異動を踏まえ、学校全体のICT活用能力向上と平行して中心的な立場の教員を育成していただきたい。 ・困難な面も予測されるが、通常学校と特別支援学校（学級）が、交流すること自体に意義がある。次年度は、地域の学校との直接（間接）交流をICTを活用して再開していただきたい。 ・今年度はこれまで以上にホームページで積極的に発信されていて、学校の様子がよくわかる。以前は実施できなかったリモートでのスポーツ交流が特に印象的であった。ポッチャをはじめ、スポーツ交流を今後も進めてもらいたい。
		②児童一人につき年間2回以上、ホームページ等で作品を発信する。				
		活動計画	活動計画の実施状況			
		①研究授業の指導内容及び指導案検討会等において、小学部の全ての教員が助言等を行い、主体的に授業づくりに関わる。	①小学部を2グループに分け、指導案作成過程での回覧による助言の記載、授業に向けた児童の実態、授業内容の検討会、授業実施後の検討会を行った。	・ホームページでの発信の様子は、学部集会で紹介した。また、作品展にも出展したことで、児童の意欲につながった。		
	②児童の実態に応じて、計画的に作品を制作する。	②病棟閉鎖のため、病棟児童の作品は制作できなかったが、通学生においては図画工作での作品制作に取り組むことができた。また交流校との共同作品も制作することができた。	・児童自身や保護者から、ホームページ閲覧の声が聞かれ、特に自分がホームページ記事を作成した児童は、成就感や達成感を味わうことができた。			
	＜情報視聴覚課＞ ・教員のICT活用に関する指導力の向上を図り、児童生徒の実態に即したICT教材や支援機器を活用することや、病棟・家庭間をつなげる「遠隔授業システム」（テレビ会議システム等）を推進する。	①ICT機器や支援機器等の活用に関する校内研修や「遠隔授業」につながる研修を年間5回以上実施する。	A		A	
		②-1「遠隔授業システム」（テレビ会議システム）を利用した学習を5回以上実施する。				
		②-2 通学生保護者へのアンケートで、「遠隔授業システム」を用いた取組の実施について、70%以上保護者が理解している。				
		活動計画	活動計画の実施状況			
		①ICT機器や支援機器等の活用に関する内容や「遠隔授業」の手法についての校内研修を実施する。	①ICT機器・支援機器を利用した研修は、改造マウスを使ったiPadの操作実習や小型コンピュータの製作等を行った。「遠隔授業」に関する研修は、「Zoom」「MeetingPlaza」			
						<p>次年度への課題と今後の改善方策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業を通して子どもの実態や指導の手立ての共通理解に取り組んだが、学部全体での共通理解までには至らない面もあ

		<p>の研修を実施した。</p> <p>②-1 始業式・終業式・学校祭、学部行事（お楽しみ会）、校外学習、交流スポーツ大会（高等部・小学部）、藤井寺、吉野川市役所等とつながることができた。</p> <p>②-2 12月に教員アンケートを、1月中旬に保護者アンケートを実施した。教員の97%が、授業等でICT機器の活用ができていた。</p>		<p>要と思われる。</p>	<p>った。各学級での学習活動の割合が多く、共通理解をさらに進める必要があり、ケース会議や引継ぎ資料を回覧したり、ICTを活用したりして、効率的で効果的な情報共有を進めたい。</p> <p>・ホームページの更新については、全教職員が実施できる方法に取り組みたい。</p> <p>・これまで、遠隔授業システムの取組は、限定的・一時的な場合であったが、コロナ禍により、「GIGAスクール構想」の整備がなされ、今年度は年度途中から遠隔授業システムを継続的に実施する体制が整備できた。次年度は年度当初から、学校と病棟・家庭・地域をつなぐことができる環境整備を進めるとともに、有事・平事を問わず教員一人一人が遠隔授業システムを実施・活用することで児童生徒の学びを保障する研修体制に取り組みたい。</p> <p>・コロナ禍により教育活動における共同学習への活動制限があることから、共同作品作りにも密を避けるなど配慮を要したが、次年度は一人一人の作品を結集する「コラージュ」の技法を用いて、感染症等による活動制限がある場合でも、一人一人を大切にすることを表現できるように取り組みたい。</p>
<p><人権教育課></p> <p>・児童生徒のその個性や能力に応じて、一人一人を大切にしたい思いを人権週間の共同作品に表現する。</p>	<p>評価指標</p> <p>①-1 全児童生徒22名が「人権の花」の取組に参加して、一人一人の個性や能力を生かした共同作品を制作する。</p> <p>①-2 人権週間後、児童生徒の個性や能力を生かした作品作りができたかどうかについての教員アンケートを実施し、80%以上の肯定的評価を得る。</p>	<p>評価指標による達成度</p> <p>①-1 児童生徒全員が「人権の花」の取組に参加して、一人一人の個性や能力を生かした共同作品を制作することができた。</p> <p>①-2 アンケート結果は、100%の教員が肯定的評価であり、「個性や能力を生かすことができた」が、86%、「どちらかというときできた」が、14%であった。</p>	<p>自己評価</p> <p>A</p>	<p>(所見)</p> <p>・「花」を人権週間のテーマに取り上げたことにより、昨年度の人権週間テーマ「船」の作品よりも、共同作品への参加が積極的になったと考える。</p> <p>・新型コロナウイルス感染症の影響で、病棟で学習する児童生徒の作品作りへの参加は困難であったが、笑顔の「花」として顔写真等でも参加ができるよう参加方法を広げたことで、全児童生徒の参加ができたと考える。</p> <p>・人権週間後は、玄関ホールに展示して、児童生徒の登下校時や来校者が目にする事ができている。</p>	
	<p>活動計画</p> <p>①-1 教職員自身が、児童生徒一人一人を大切にしたい思いを「人権の花を咲かそう」というテーマに込め、日頃の学習活動に取り組む。</p> <p>②12月4日から12月10日の人権週間に、取組への思いを共同作品として表現したものを展示したり、ホームページ等で発信したりする。</p>	<p>活動計画の実施状況</p> <p>①-1 児童生徒一人一人を大切に日頃の学習活動に取り組んできた成果が「人権の花を咲かそう」という共同作品に表れた。</p> <p>②12月4日から12月10日の人権週間に、談話ホールで共同作品を展示するとともに、児童生徒会による校内放送やホームページ等で発信した。</p>			

令和2年度 学校評価（総括評価表）

重点課題	重点目標	評価指標	評価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)	
			評価指標による達成度	自己評価		総合評価
<p>◆安心安全な学校づくりを推進する。</p>	<p><小学部></p> <p>・医療や福祉等の関係機関と連携し、専門家の助言を学校の教育活動に生かし、安心安全な学校生活を送</p>	<p>①年度末に授業に関するアンケートを実施し、「専門家の意見を取り入れ安全に活動できた」という評価を、小学部教員の80%以上から得られる。</p> <p>②小学部で統一した引継ぎ資料の</p>	<p>①小学部教員へのアンケートでは、「そう思う」が80%、「どちらかというとき思う」が20%の結果であった。</p> <p>②アンケートを基に引継ぎ資料の様</p>	<p>A</p>	<p>(所見)</p> <p>・新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、臨時休業後の教育活動再会にあたっては、これまで以上に安全面に焦</p>	<p>・学校紹介が映像であり、学習内容がよく分かった。コロナ禍でも学校の安心安全を確保しながら、全ての数値目標を達成し、A評価となったことに感心し</p>

れるように体制を整える。	様式を作成するとともに、専門家の意見を反映させた引継ぎ資料を、小学部児童10名全員に作成する。	式を作成できた。児童11名の資料は現在作成中であり、今年度中に達成見込みである。 ※3学期より1名増	点を当て、医師の指示・助言を受けたり、外部講師のセラピストに相談・助言を受けたりして取り組んだ。その結果、安心安全な教育活動の実施につながり、児童一人一人の力が一層発揮され、大きな成長を得ることができた。	た。また、先生と生徒が一体となり、コロナ禍でもできることに取り組み、学校が一丸となっているように感じた。 ・施設敷地の一部に、土砂災害特別警戒地域が含まれている。施設利用者が重度・高齢化してきていることから、防災面では施設から移動しなくても安全確保できることを進めている。防災面や、スポーツなど、実施可能な部分から学校と連携や交流をしていきたい。
	活動計画	活動計画の実施状況		次年度への課題と今後の改善方策
	①-1 食事に関する指導や自立活動（からだ）の授業等、自立活動を実施するにあたり、定期的に専門家の助言を受けて、指導に反映させるとともに、指導にあたる教員間での共通理解を図る。 ①-2 12月中に、小学部教員に自立活動に関するアンケートを実施する。 ②引継ぎ資料の作成では、グループ会を実施する等、複数名の視点を踏まえた引き継ぎ資料となるよう作成する。	①-1 学校医、徳島大学病院等各主治医、担当セラピスト及び外部講師のセラピストと連携をとり、学校での自立活動等に関して専門家の助言を受けて、指導に反映させた。ケース会や記録の回覧により共通理解を図った。 ①-2 12月に、小学部教員にアンケートを実施し、全員の回答を得た。 ②アンケートにより引継ぎ資料で必要な項目を精選し、引継ぎシートの書式を作成した。2月中に作成し、内容を検討する予定である。	・不安を感じやすい児童についても、保護者及び関係機関と連携を進めたり学習活動の見直しを図ったりすることで、児童がより安心できる学校生活を送ることができた。今年度の成果を次年度に確実ににつなげたい。	・コロナ禍でリハビリ見学ができないなど専門家との相談機会が少なかったが、病院によっては直接相談ができた。電話相談ができた。事例もある。次年度は、コロナが収束していない場合でも連携できる方法により、医療・福祉等の専門家との連携を密にし、学習活動時の安全確保を徹底したい。保護者を通じた電話相談や書面での連携方法の共有や、連携の必然性の確認など、連携を進めるうえでの教員研修が必須である。 ・コロナ禍のため、防災学習を児童生徒のみで行うこととなり、一人一人の特性や発達段階を踏まえ、防災についてじっくりと学ぶことができたが、防災学習を通じた地域とのつながりを深める活動はできなかった。次年度は、新型コロナウイルス感染症の収束状況を見据えながら、地域と交流したり、地域住民の防災意識を喚起するような活動も取り入れていきたい。
<特別活動課> ・防災学習を通して、災害時における児童生徒の主体的な安全確保の能力向上を図る。	評価指標	評価指標による達成度	自己評価	
	①年間2回の避難訓練以外に、各学部における防災学習を、年間1回以上実施する。	①各学部で年度当初に実施予定日を決定し、それぞれの学部で1回実施した。	A	(所見) ・毎年、各学部で継続的に防災学習を行い、自然災害に対する児童生徒の防災意識は高まりつつあると思われる。 ・来年度以降も、それぞれの学部の実態に合わせた教材を工夫し、学習を継続していくことで主体的な安全確保の能力を向上させていきたい。
	活動計画	活動計画の実施状況		
	①-1 各学部の児童生徒の実態に応じて、児童生徒が興味を持ち、積極的に取り組める学習内容を選定する。 ①-2 災害時を想定した防災学習を実施することで、災害時における安全確保について適切に対応できる力を養う。	①-1 小学部では、視聴覚教材を用いて災害から身を守る方法を指導し、中・高等部では、災害時に活用できる簡単な生活用品（スプーンや皿）の作り方を指導した。 ①-2 小学部では、自然災害のシミュレーション映像を見て、自分の身を守る適切な行動を考える学習を行った。中・高等部では身近にあるものを活用し、災害時に対応するための実践的な知識を養った。		

令和2年度 学校評価（総括評価表）

重点課題	重点目標	評価指標	評 価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)
			評価指標による達成度	自己評価	
◆教員の専門性の向上を図り、授業力と指導力を高める。	<中・高等部> ・遠隔授業システム(テレビ会議システム等)を活用した学習活動を実施し、病弱特別支援学校教員としての知識と技術を高める。	①学校と病棟及び家庭・地域を、テレビ会議システム等を活用して年間6回以上学習活動を進める。	①新型コロナウイルス感染症予防のため病棟閉鎖が継続され、病棟での授業はできなかった。学校と家庭、地域等をつないだ授業は年間6回以上実施できた。	A	(所見) ・吉野川市社会福祉課障がい福祉係や11番札所「藤井寺」と連携した地域交流では、学校とリモートでつなぎ、遠隔交流を実施できた。「エシカル」として取り組んだ作品・製作過程の紹介や、質疑応答を行い、特別支援学校の教育活動についての理解・啓発を進めることができた。 ・遠隔授業後に振り返りを行うことで、遠隔交流を重ねるごとに生徒の主体性が見られ、交流先を意識した関わりができた。また、教員も遠隔授業後の改善を重ね、遠隔授業の質(活動内容、構図、音質、切替えのタイミング等)を高めることができた。
		活動計画 ①-1 教員を2グループに分け、A班(学校と病棟及び家庭)、B班(学校と地域)に分けて、遠隔授業の活動計画を立て、実践を進める。 ①-2 学習におけるタブレット端末活用方法を検討しながら進め、活動内容の振り返りと改善を行い、次の取組に生かす。	活動計画の実施状況 ①-1 今年度の状況を踏まえて、学校と地域・家庭での遠隔授業を中心に計画と実践を進めた。特に、一部の生徒が地域に出向いた地域交流では、回数を重ねるごとに成長が見られ、主体性や社会性の促進につながった。 ①-2 臨時休業中にタブレット端末の操作研修に取り組み、教職員の操作方法の習熟につながった。遠隔授業実施後は、活動の流れや画面の切替えなどについて振り返ることで、次の取組に生かすことができた。		
	<研究課> ・研修会を通して、病弱教育や肢体不自由教育、発達障がい等に関する知識や経験を深め、専門性の向上を図る。	①外部講師を招聘した自立活動に関するワークショップ形式の研修会を3回以上実施する。	①身体の動き、手の機能や発達、摂食嚥下についての研修会を計3回実施した。	A	(所見) ・外部講師を招聘した研修会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、県外の講師を招聘した研修会は中止としたが、その他の研修会は、感染症対策を十分に行い実施することができた。 ・研究課で主催するミニ研修会は初めての取組となり、自由参加であったが、80%を超える教員が参加し、それぞれの専門性を高めることができた。教員個々のニーズに応じた自由参加の研修会を数多く設定することにより、主体的に参加しやすく、また指導に生かすことのできる研修会になったと考える。
		評価指標 ②特別支援教育や福祉に関する内容のミニ研修会を年間5回以上実施する。	評価指標による達成度 ②教材教具、発達障がい、アセスメント、福祉等に関するミニ研修会を合計9回実施した。	自己評価 A	
		活動計画 ①-1 理学療法士や作業療法士、言語聴覚士等の専門家を招聘する。 ①-2 事後アンケートを実施して、満足度や改善点を把握し、次年度に生かす。 ②-1 臨時休業中や夏季休業中等にミニ研修会を実施する。 ②-2 年度当初から活用できる機器や教材を紹介したり、事前ア	活動計画の実施状況 ①-1 社会人講師として本校に関わっている理学療法士や作業療法士、言語聴覚士を講師として招聘した。 ①-2 事後アンケートでは、各研修会ともに90%以上が「指導に生かせそうだ/十分生かせそうだ」の回答であった。また聞いてみたい内容について自由記述で回答が寄せられた。 ②-1 臨時休業中(4月)や2~3学期にミニ研修会を実施した。83%の教職員がいずれかのミニ研修会に参加した。 ②-2 臨時休業中に機器、教材を紹介するミニ研修会を実施し、2~3		
					次年度への課題と今後の改善方策 ・生徒の実態によって遠隔授業における目標が異なるため、試行錯誤しながら学級・HR担任を中心に取り組み、全体的な活動内容と活動方法について共通理解を持って進めてきた。次年度は遠隔授業の取組内容や方法をさらに高めるために、タブレットの活用方法に焦点を当て、取

		ンケートを実施したりすることで、教員の研修ニーズを把握するとともに、校内の教員を講師として、参加しやすいミニ研修会を実施する。	学期に事前アンケートを踏まえた「アセスメント」「教材・教具の基礎知識」「発達障がい」についてのミニ研修会を計画・実施した。						
＜教務課＞ ・昨年度作成した「道徳科」の評価文例集に、文例を追加・修正することで、学校教育活動全体を通して、道徳性を養うための授業づくりに資するようにする。	評価指標	①12月末までに文例の追加等を行い、「道徳科」の評価文例集を更新・周知することで、道徳教育の推進及び評価等に資するようにする。	①文例を追加した「道徳科文例集」を更新し、12月の職員会議で周知することができた。	自己評価 A	（所見） ・昨年度と今年度で、「道徳科」の文例集作成の取組は終えることができた。 ・今後は、この文例集が教育活動でどう活用されていくかについて留意する必要があると考える。また、定期異動に合わせて年度当初に文例集を紹介したり、学習の評価時期にも改めて文例集活用の案内を実施したりしていきたい。				
	活動計画	①-1 道徳教育全体計画の各目標をもとに考えられる評価の文例について、各学部から募集する。 ①-2 教務課で取りまとめ、道徳科以外の、各教科等を合わせた指導や、教育活動全体を通じて行う道徳の指導についても、文例を更新できるようにする。	①-1 各学部から文例を募集し、34の文例を集めることができた。 ②-2 道徳科だけではなく、各教科等を合わせた指導や教育活動全体を通じて行う道徳の指導についての文例を追加して、文例集を更新することができた。						

組が充実するようにしたい。
・安心安全な授業の実施に必要な情報提供を充実させるために、研修会の内容を焦点化したり、理解しやすい表現を用いるように取り組みたい。また、コロナ禍でも県外の専門家を講師とする公開研修会を開催し、地域の学校・園の教員が参加できるように、リモート形式での研修会を開催したい。
・「道徳科」評価文例集の活用度検証のため、教員アンケートによる認知度・活用度を把握したり、アンケート結果を参考にしたりして、周知及び活用の方法を改善していきたい。

令和2年度 学校評価（総括評価表）

徳島県立鴨島支援学校 N o 4

重点課題	重点目標	評価指標	評 価		学校関係者評価 (学校関係者の意見)	
			評価指標による達成度	自己評価		総合評価
◆保護者や地域、関係機関と連携や協働を図り、開かれた学校づくりを推進する。	＜中・高等部＞ ・学校や生徒の情報の共有や発信をし、保護者との連携に努める。	①学校の教育活動と、その時点における本人・保護者の教育的ニーズを把握するために、3回以上保護者面談を実施する。	①各クラスごとに、3回以上面談を実施し、保護者と情報共有したり、ニーズを把握したりすることができた。	A	（所見） ・保護者との面談については、個別の指導計画の配付時期に合わせて面談を実施したり、毎日の送迎時に話したりすることで情報共有と連携を深めた。特に高等部では、就業体験時や進路決定に向けた面談機会が多かった。 ・様々な話し合いを通して、個々の生徒の共通理解が進んだ。特に他県出身生徒の事例では、身体面の現状や学習内容の焦点化、進路の方向性等の情報共有ができた。各話し合いの情報は、学級担任を通じて保護者に伝えるとともに、教育活動の質の向上につな	・次年度の課題として記載された内容が、今年度の取組で改善策や手立ての変更がなされたりしている。また、達成基準を昨年度よりも高く設定した場合でも、数値を達成できていることが評価できる。 ・教育活動において、いかに保護者や関係機関と必要な情報を共有するかが重要となる。学校を中心に関係機関の共通理解が進むことにより、児童生徒の支援の充実につながる。 ・地域の資源を活用し、周囲を巻き込みながら取り組むことがよい結果につながるため、今後関係機関を十分に巻き込み、児童生徒・保護者の支援に取り
		②生徒の特性や学習状況等について、生徒一人あたりケース会を4回以上実施することで、教員間の共通理解を図り、情報共有を充実させる。 ③ホームページへの掲載を、教員一人あたり1回以上実施する。	②個別の指導計画をもとに、各学部や学習グループで、生徒一人あたり4回以上のケース会を実施することができた。 ③教員一人につき、1回以上ホームページへの記事の掲載ができた。			
		活動計画	活動計画の実施状況			
		①保護者面談を学級担任全員で行い、生徒や保護者の情報について共有を図る。 ②学部やグループでのケース会を	①通学生(家庭・病院)、訪問生(家庭・病院)の保護者と、面談や電話等で話をして連携を図り、児童生徒の状況について学級・HR担任間で共有することができた。 ②各学部におけるケース会、学習グル			

	<p>計画的に実施して、学習状況等の共通理解を図り、必要に応じて保護者に報告する。</p> <p>③ホームページ担当者研修会で掲載方法を学び、生徒の活動の様子や作品等をホームページに掲載し、情報発信を進める。</p>	<p>ープ、授業担当者間で、学習状況の共通理解に努め、必要に応じて保護者に報告することができた。</p> <p>③ホームページ担当者研修会に参加して、ホームページの掲載方法を学ぶことで、教員一人一人が生徒の活動の様子や学校の取組について、魅力や特色がより理解できるような記事を作成し、情報発信することができた。</p>	<p>がった。</p> <p>・教員一人一人が学校の魅力・特色を発信し、学校行事や学習の様子、作品の紹介等の記事を掲載できた。また、生徒自身が記事を作成する「中・高等部の部屋」を新設することで、生徒も積極的に記事を発信し、地元紙のコラムにも取り上げていただいた。</p>		<p>組んでいただきたい。</p> <p>・「新しい時代の特別支援学校の在り方検討委員会」では、新しい特別支援学校の在り方が報告され、「ダイバーシティ社会」の形成に向けた取組が提言されている。これからも鴨島支援学校の良さを発揮されながら、地域や関係機関との連携を進めていただきたい。</p>
<p><特別支援教育課></p> <p>・児童生徒及び保護者のニーズを把握し、関係機関との連携をすすめるとともに、地域においてのセンター的機能の推進を図る。</p>	<p style="text-align: center;">評価指標</p> <p>①進路ニュースを年5回以上発行するとともに、ホームページに掲載する。</p> <p>②「かも先生の特別支援教育だより」と題した特別支援教育に関する情報を年5回程度ホームページに掲載する。</p>	<p style="text-align: center;">評価指標による達成度</p> <p>①進路ニュースを年5回定期的に発行し、ホームページで発信できた。</p> <p>②「かも先生の特別支援教育だより」を年間5回作成し、ホームページで特別支援教育に関する情報や助言を発信できた。</p>	<p style="text-align: center;">自己評価</p> <p style="text-align: center;">A</p> <p>(所見)</p> <p>・児童生徒及び保護者のニーズ調査では、授業及び面談、進路希望調査を通して、丁寧な実態把握をすることに努め、必要に応じてケース会議を実施した。</p> <p>・本校の状況等については、ホームページを用いて情報発信をしたことで、相談支援事業者をはじめとする関係機関や地域の方にも周知を図ることができた。</p> <p>・「かも先生の特別支援教育だより」では、地域の声を反映した内容を取り入れるとともに、読み手が分かりやすい説明を心がけて情報発信を行った。</p> <p>・今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、各種会議や公開研修会が中止となったこともあり、例年より周知機会が少なかったが、さらに多くの方に閲覧していただくために、次年度も継続して周知を図るとともに、掲載内容の充実に取り組みたい。</p>		<p style="text-align: center;">次年度への課題と今後の改善方策</p> <p>・学習グループや授業担当者間でケース会議を実施して、各生徒の共通理解を進めることができたが、次年度はさらに共通理解が深まるよう準備したい。また、支援方法変更時には、担当者間で情報共有を実施したが、次年度は支援方法変更後の検証に取り組み、学習活動の質の向上に努めたい。ホームページ更新は、担当制にして情報発信が定着したが、今後は主体的に情報発信できるよう取組を進めたい。</p> <p>・今年度の取組を継続し、地域の声や巡回相談で訪問した学校等の感想やニーズを踏まえ、タイムリーな情報をホームページで発信し、必要に応じて巡回相談時に配付するなど、関係機関や地域の方々が活用可能な方法に取り組みたい。</p> <p>・自立支援協議会定例会や本校巡回相談員が講師を務める研修会において、二つの情報発信内容の周知をさらに進めたい。</p>
	<p style="text-align: center;">活動計画</p> <p>①-1 進路ニュースを積極的に作成し、家庭に配付する。また、地域には自立支援協議会等で、ホームページ掲載について周知を図る。</p> <p>①-2 進路ニュースの内容に、在校生の就業体験の様子や卒業生の進路状況及びアフターフォローについても取り入れ、保護者や地域の関係機関に卒業後の進路について周知を図る。</p> <p>②-1 巡回相談員活動において、地域の特別支援教育に関するニーズを把握し、それらのニーズに応じた情報をホームページに掲載して地域等へ発信する。</p> <p>②-2 「かも先生の特別支援教育だより」を取りまとめ、年度末に特別支援連携協議会等で配付する。</p>	<p style="text-align: center;">活動計画の実施状況</p> <p>①-1 作成した進路ニュースは保護者に配付するとともに、地域においてもホームページへの掲載を周知した。</p> <p>①-2 進路ニュースでは、在校生の就業体験の様子や卒業生の進路状況、障害福祉サービス情報等を掲載することができた。</p> <p>②-1 障がい特性への配慮点、関係機関との連携等について、ホームページに掲載して地域等へ発信することができた。</p> <p>②-2 「かも先生の特別支援教育だより」を取りまとめ、自立支援協議会等において、配付することができた。</p>			